

## ひたすらにキリストを

わたしたちはいま2021年の受難節の日々を歩んでおります。受難節は教会暦というキリスト教独自のカレンダーで、一年をクリスマス、イースター、ペンテコステの三大祝日で区切り、クリスマスの前ならば4週間の待降節（アドベント）、イースターの前には40日間の受難節（レント）をそれぞれ置いて、聖書日課に従いながら祈り、黙想をして、キリストのご降誕、キリストの受難と死、そして復活の意味を思い巡らす時をもちます。これらはイエス・キリストの御生涯に、わたしたちの命として与えられている時間を重ね合わせることで、キリスト者として生きるわたしたちの信仰と霊的な感性を養うことを目的としていると考えてよいでしょう。ひたすらにキリストの道を生きたための信仰の工夫と言ってよい。とくにこの受難節の期間は、教会の歴史ではもっとも大切にされており、十字架に向かわれる主イエスの道行きを思いつつ、わたしどもも自分の十字架を負って、キリストの後を追う克己節制のときとして用いられてきました。初代教会の頃は、洗礼はイースターに行われ、受難節は悔い改めの期間としてみずからの罪を見つめ、救い主であるキリストの恵みを味わい、新しい誕生に備える時でした。

さて、いまわたしたちはフィリピの信徒への手紙を読んでおりますが、獄中書簡ともいわれるこの手紙を受難節の時に呼んでいることは、なかなかタイムリーだと思われています。それはパウロの投獄の受難を「教会のコロナ捕囚」ともいうべき現在の不自由な状態と重ね合わせることで見えてくるものがあるのではないかと思うからです。奇妙なことに、牢屋に入れられて苦しんでいるはずのパウロに、逆にフィリピの信徒たちが励まされている。パウロの書いたこの手紙を読んでいると、

「苦しみ」や、この後には「重い病」、さらに「死」というテーマが出てきます。決して明るい境遇ではありません。しかし美術工芸品でたとえれば、日本の蒔絵の美しさが黒い漆を塗り重ねた上に金粉で描くことであれやかさが引き立つように、この手紙の喜びが輝くのも、パウロの置かれていた絶望的な状況、苦痛や死といった暗闇が背景にあるからです。それにもかかわらず、「苦難のなかの喜び」を表すパウロに、この世から出たのではない、上よりの支えと平安、キリスト・イエスの恵みによって生かされる福音信仰の与える不思議な慰めと力が見て取れます。ここにこの手紙の価値があるのです。それはことパウロに関して言えば、彼が、イエスさまが山上の説教で言われたことを弁えていたからかもしれません。主イエスは、どのような人が幸いであるかを人々に教えられました。その最後を「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい、大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも同じ様に迫害されたのである」と結ばれました。パウロが、フィリピの信徒たちに「喜びなさい」というのは、イエスさまの教えに従っているから、主の招きに応えているからなのです。それがイエスさまに教えて頂いたキリスト者の戦いの作法であるとパウロは心得ているのです。

18 節以下を読みますと、「あなたがたは、一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦って」いる同士だとパウロは呼びかけます。キリスト・イエスに結ばれているとは、同じ福音伝道の戦いに与るものなのだということをフィリピの人々に伝え、そこで一致することを求めます。「ひとつの霊に立って」というのは、注がれる神の霊はキリストの霊でありますから、ふたつはない。しかし、「心を合わせ」

と新共同訳聖書が訳した個所は「ひとつの心に立って」と訳すことも出来る個所で、これは霊はひとつですが、わたしたちの心はなかなかひとつにまとまらない。一致が難しい。それは霊がわたしたちに与える賜物の違いや、タラントンの差によるものでもあるのですが、それを優劣の違いのようにとらえてぎくしゃくすることもある。また福音に対する理解の違いが共同体の足並みの乱れとなることもある。全体の働きが頭（かしら）であるキリストに従うものであることを弁えることで一致をあらわすような働きを生み出したい。しかしながら、ここでも自分中心の考えであるとか、キリストに結ばれる以前の「わが・まま」のやり方から抜けきれないためにキリスト者の集団が一致できない。そういう問題があったことが、このあとの手紙の内容からも推測できます。そこに伝道者パウロの戦いがあったと言ってよい。皆が一つの神の霊のもとに立ち、ひとつに心をあわせて、わたしと同じ福音のための戦いに加わって欲しいとパウロは獄中から願い求めるのです。

今回、この聖書個所を読んでいて、わたしは篠田潔先生のことを何度も思い出しました。というのは、篠田先生が42年間仕えた半田教会を辞任なさるとき、牧師交替記念感謝会の冊子を作ったのですが、そのとき当時、知立伝道所におられた塩谷直也先生にお願いしてイラストを描いてもらいました。そこに添えられた聖句がこのフィリピの信徒への手紙1章30節「あなたがたは、わたしの戦いをおかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いを、あなたがたは戦っているのです」という個所でした。この聖句を選んだのは、篠田先生からわたしたちに、知多半島における伝道のバトンが託されるわけであるけれども、その働きをとともに担っていこうという思いでした。同じ戦いをこれからも続けて参りましょうという祈り願いがあ

りました。このフィリピの信徒たちの教会は、まだ年若い教会です。誕生して 20 年も 30 年もたっているような教会ではない。二代目三代目もちろんおらず、初代の信仰者ばかりだったでしょう。それゆえにあらゆることが手探りでした。手本となるようなガイドはない。だからパウロは自分にならうように勧めます。そして福音のゆえに苦しみを受けることに驚かないように、それは価値ある戦いなのであり、神の願いによるのであり、そこに恵みによって神の栄光が現わされることを伝えています。みなさい、わたしは投獄されたが、その理由がキリスト・イエスを宣べ伝えたためであることが兵営全体に知れ渡り、かつ牢獄においても挫けることなく喜び、メッセージを発信し続けているパウロの人格から、キリストの福音の力があふれ出している。弱さの中に働く神の力の偉大さ、人間の思いや知恵を越えた力に生かされていることが分かる。そのような福音の富、神の恵みに与っているあなたがたは、わたしとともにこの福音伝道の戦いを生き抜いて欲しいと願っています。神はあなたがたにキリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられていることを知って欲しい。これは大切な招きですね。キリストのために苦しむことは、天に宝を積む生き方であると主イエスは言われました。パウロも、キリストのために苦しむことがわたしたちの信仰生活にとって益するものであることを知り抜いていたのです。教会暦に受難節が設定されているのも同じ目的のためであり、イエスさまと苦しみを共にすることがわたしたちを主にいよいよ結びつける。神さまとより深い交わりに生きることの出来る得難い機会となるのです。それは何か特別なことをするのではありません。聖書の御言葉によって人格と人生と共同体を形作るという基本に忠実であればよいのです。御言葉を慕って礼拝を守るわ

わたしたちのあり方、こうした状況の中にあっても折れないありかた、そこに神の命が働いています。このことに関して、最後にもうひとつ篠田先生とのエピソードを紹介して終わります。わたしは伝道師として赴任した当時、先生に牧師にとって何が大事でしょうかと訊いたことがあります。すると早く 40 歳になりなさい、と言われました。半分冗談だったと思いますが、赴任当時わたしは 35 歳でした。40 は論語では不惑の年ですが、惑わないと言うよりも人生でいろいろなことを経験する年齢にならないと牧師として用いられないという思いだったようです。かといっていきなり 40 歳になれるわけではありませんので、重ねて訊きますと、大切なのはひたむきであることと仰られました。ようするに一途であること、手を抜かないこと、熱心なこと、一所懸命なこと、いろいろと言いはあると思います。ただ的はずれや、見当違いの熱心さもままありますから、注意がいきます。しかしひたすらにキリスト、教会の信仰に立つことに注意を払えばよい。それこそが、パウロの言う「ひとつの霊を注がれて、ひとつの心となって」教会で共に生きる、そこから離れないこと。そうして生きていけば、神さまに用いて頂ける。証をする器として用いられることをパウロも篠田先生もよく知っておられたのです。伝道者の思いですね。

わたしたちは主イエス・キリストの福音という価値あるものに関わっている。わたしたちは福音に与って生きているとき、罪と死を退ける究極的なものに関わりを持っているのです。この確信が、パウロをどこにいても揺るがぬものとしています。苦難をも喜びに変えることのできる信仰にもとづく生きざまを、わたしたちもこの手紙から学び、福音伝道の歩みを続けたいと願います。

お祈りいたします。